

被服の縫製指導に関する研究（４）

——なみ縫い技能の習得と意識——

A Study on the Teaching of Sewing Garments（４）

Learning of *Naminui* Skills and Consciousness

(1991年4月3日受理)

三田利子
Toshiko Mita

Key words: なみ縫い, 技能の習得, 意識

目 的

昭和59年度本学家政科家政専攻入学生を対象として、被服構成学実習に関する意識調査を行った¹⁾ところ、学生には被服学等専門科目を履修して、家庭生活に役立てたいという意欲が大きいことが判明した。この意欲に対し、ある程度の成功感を与えるには、被服構成実習が果たす役割は大きい。ところが限られた時間内に履修効果を高めるには、縫う技能の習得を無視することはできない。縫い技能の習得は本来ならば、学校教育における被服製作指導で習得されるべき基礎的教育であるが、実態としては学校教育の現状からこの段階での習得は不可能に近い。昭和59年度入学者の実態からもそのことは裏付けられる¹⁾。

そこで縫う技能の習得については、これまで2回にわたり基礎調査を行い、その結果を「被服の縫製指導に関する研究（２）—なみ縫い指導にかかわる基礎調査—」、「被服の縫製指導に関する研究（３）—なみ縫い技能の習得と縫い目の質的評価—」として報告²⁾³⁾した。これらの報告では、なみ縫い縫い目の質的側面を数量化することにより、従来の方法に比較して客観的に評価することができ、縫い技能の習得は初期1年間の効果が大きいことが明らかになった。初期1年間の習得とは、2か年継続履修した者の初期1年間で、第2年次の技能習得に比較した場合をさしている。第1年次の習得効果がよい理由はいろいろあろうが、ここでは第1年次に早く上達したいという意識面の効果が予想される。意識が人間の行動に深くかかわることは既定の事実であるが、なみ縫い練習効果となみ縫いに対する意識との関連についての問題はいまだ解明されていない。

そこで、なみ縫いに際して上達するための意識内容となみ縫いの目標としている「速さ」、「縫い目のきれいさ」との関連を探り、また、毎回の練習効果も確かめ、日頃のなみ縫い指導に役立てようと本研究を取り上げた。

方 法

1. 対象

昭和63年度入学家政科家政専攻147名のうち、被服構成実習を第1学年前期で必修1単位、後期選択1単位履修し、第2学年前期、後期共に選択各1単位履修した学生20名とした。

2. 実施計画

(1)調査期日

2年間にわたって技能の定着状況を把握するためには、毎授業時になみ縫い練習の結果を調査することが望ましいが、それは諸事情で不可能であるため、表1に記したように一定期間を区切り、毎年2回計4回実施した。

(2)指導態様

調査に当たって、毎回の指導態様を示すと、次のとおりである。

第1回は被服構成実習（和裁）の最初の授業に「なみ縫いの正しい方法」について、ビデオ教材⁴⁾により指導し、10分間実地指導の後、2分間なみ縫いした。

その後、毎回の授業では自由練習として特に練習時間を決めて実施はしていない。第2回から第4回は、被服構成実習（和裁）の始業時5分間練習した後、2分間なみ縫いした。

念のため、第4回終了までの2か年間の教材を示すと、表2のとおりで、第2回実施のさいは、大裁ち女物単衣長着を製作した後のなみ縫い練習であった。

表1 なみ縫い評価資料実施時期

時間 回数	実 施 時 期		
1	第一年次	前期授業開始時	昭和63年4月
2		後期授業開始時	昭和63年10月
3	第二年次	前期授業開始時	平成元年4月
4		後期授業終了時	平成2年1月

表2 被服構成実習（和裁）教材

時 期	履 修 分 類	教 材 名
第一年次	前 期	必 修
	後 期	選 択
第二年次	前 期	選 択
	後 期	選 択

3. 試料

試料の諸元は表3のとおりである。

試料の縫合線は晒木綿80cmを幅二つ折りとし、折り山から1cm入った位置を1本の手縫い糸で縫い合わせた。(図1)

表3 資料の諸元

試料布	諸元	厚さ (mm)	密度(本/cm)		剛軟度(mm)	
			タテ	ヨコ	タテ	ヨコ
晒木綿		0.37	20	20	38	35

試料糸	諸元	繊維	番手(S)	色
手縫い糸		綿100%	30/2	赤色

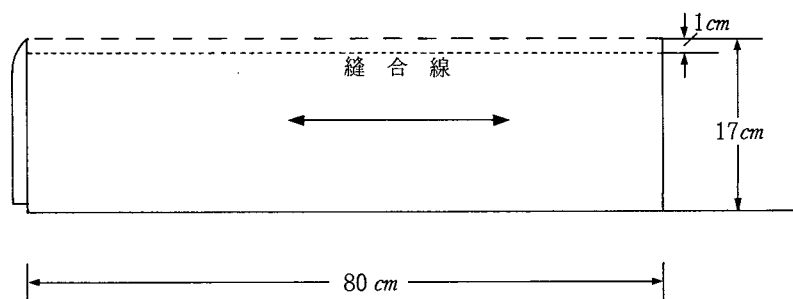


図1 試料布の縫合線

4. 測定

なみ縫い練習の望ましい要素とは、①「速さ」、②「縫い目のきれいさ」である。

① 「速さ」とは、

所定の時間内にどれだけの長さが縫えたか、「縫いの全長」をさすので全長を測る。

② 「縫い目のきれいさ」とは、

「1目の長さ」を測定し、標準偏差を知ることによって、大小不揃いか否か分かる。

③ 「角度」とは、基線に対する「縫い目のゆがみ」のことであり、その角度を測定することにより、一般にいうおどり目か否か分かる。

したがって、測定項目は、

①、縫いの全長、

②、1目の長さ、

③、角度、

以上、3項目となる。

①の測定には、物指しを用い、②、③の測定にはデシタイザーと、マイクロコンピュータを組み合わせた“なみ縫い計測装置⁵⁾”を使用した。

意識調査については、４回にわたるなみ縫い実施時に縫い技能の向上を意図する場合、意識されると予想される７項目の意識内容（表４）を設定し、そのつど回答を１項目に限定せず被験者が主体的に取り上げようとする重点目標を自由に記録させた。

表４ なみ縫い意識調査

項目番号	意識内容
1	速く縫う
2	きれいに縫う
3	針の持ち方を正しくする
4	指ぬきを正しくあてる
5	両手を正しく動かす
6	両手の間隔は5cmくらいにする
7	糸こきをよくする

結果と考察

1. 縫いの全長、1目の長さ、角度の全体的傾向について、

被験者20名の縫いの全長、1目の長さ、角度をまとめると表5 意識の内容と測定結果（縫いの全長、1目の長さ、角度）のとおりである。

表5から4回にわたる、縫いの全長、1目の長さ、角度について、それぞれの平均と分散をまとめると表6のとおりである。回を重ねるごとに前回と比較し、縫い目の質的向上がみられるか否か差の検定の結果は表7のとおりである。これによると速さ、即ち、縫いの全長は第1回と第2回の間1%、第3回と第4回の間5%、第1回と第4回とでは1%で有意差を認めることができた。このような結果から、縫いの全長は著しく伸びたので速く縫えるようになったといえる。

次に1目の長さについて同様に比較すると、第1回から第2回にわたっては1%で有意差が（－）として認められ、第2回は1目の長さが第1回より長く、分散も第2回が大きくなっている。何故か第2回の上達が認められない結果といえる。第2回と第3回を比較すると、1%で有意差が認められた。最終的に第1回と第4回をみると差が認められないため、1目の長さは2年間変わらず、最初から3～4mmで縫えていたといえる。

次に角度、即ち、1目のゆがみは一般に「おどり目」と称している。角度の平均では中間段階では有意差が認められず、第1回と第4回と比較した場合僅かに10%の有意差にしか過ぎない。したがって差の傾向があるという程度である。角度の偏差についても中間段階では差が認められず、第1回と第4回と比較した場合5%で差を認めることができた。

以上の結果から、まず縫いの速さは第1回から第2回にかけて著しく速くなり、最終的にも進歩は認

表5 意識の内容と測定結果(縫いの全長, 1目の長さ, 角度)

学 生	項目 回数	意識の内容							測定結果				
		1	2	3	4	5	6	7	縫いの全長 cm	1目の長さ		角 度	
										平均 mm	標準 偏差	平均	標準 偏差
〔1〕	1		●						23.0	2.7	0.62	2.3	7.60
	2		●	●		●			36.0	3.0	0.68	3.0	7.97
	3		●	●		●			30.0	2.7	0.62	2.8	6.90
	4		●	●					41.0	2.6	0.48	2.3	5.73
〔2〕	1		●						17.0	3.0	0.29	3.4	8.11
	2		●	●		●			30.0	3.1	0.65	3.4	7.58
	3		●	●		●			32.0	3.0	0.36	4.6	17.35
	4		●	●					34.0	2.9	0.41	4.7	13.39
〔3〕	1	●	●						20.5	2.7	0.50	6.6	14.73
	2	●	●	●		●	●		31.5	3.6	1.23	3.6	8.18
	3	●	●			●			30.5	2.9	0.56	4.1	10.76
	4	●	●	●			●		44.5	3.6	0.52	4.1	9.97
〔4〕	1	●	●			●			6.0	2.2	0.50	4.9	10.57
	2	●	●	●		●			27.0	2.9	0.75	6.6	14.55
	3	●	●	●					21.0	2.5	0.51	3.9	10.57
	4	●	●						37.0	2.8	0.40	5.3	13.23
〔5〕	1			●					16.0	2.5	0.51	5.7	16.39
	2	●	●			●			28.6	3.7	0.63	3.2	11.65
	3		●						31.0	3.2	0.61	3.3	9.72
	4		●			●			45.0	3.6	0.30	3.7	10.37
〔6〕	1	●	●						23.5	2.6	0.38	3.0	6.06
	2	●	●				●		25.0	2.6	0.46	2.5	5.20
	3	●	●			●			36.0	2.4	0.39	3.0	9.92
	4	●	●			●			32.0	2.8	0.45	3.7	9.42
〔7〕	1		●				●		24.0	3.5	0.48	3.4	10.29
	2	●	●						33.0	3.9	0.57	2.4	5.91
	3	●	●						36.0	3.7	0.40	2.1	6.64
	4		●			●			26.6	3.1	0.29	2.0	5.94
〔8〕	1	●							35.0	4.1	0.71	4.0	11.31
	2	●		●			●		39.0	3.7	0.69	4.3	10.65
	3	●	●				●		44.0	3.4	0.49	3.3	9.40
	4	●	●	●					47.0	3.2	0.53	2.8	6.03
〔9〕	1	●	●						18.0	2.3	0.38	4.2	10.10
	2	●	●				●		27.0	3.1	0.58	3.6	10.28
	3	●	●						37.6	3.1	0.73	3.3	7.42
	4	●	●			●			36.0	2.7	0.50	4.6	11.64
〔10〕	1		●			●			18.0	2.4	0.44	2.5	59.7
	2	●	●	●		●	●		28.0	3.1	0.71	2.6	6.33
	3	●	●			●	●		24.0	2.7	0.49	2.4	5.14
	4	●	●	●					34.6	2.7	0.44	2.3	5.21

(注) 速さ, 1目の長さ・角度いずれも表目

被服の縫製指導に関する研究（４）

学 生	項目 回数	意識の内容							測定結果				
		1	2	3	4	5	6	7	縫いの全長 cm	1目の長さ		角 度	
										平均 mm	標準 偏差	平均	標準 偏差
[11]	1	●	●						12.0	2.2	0.51	6.6	15.62
	2	●	●	●					28.2	3.7	0.95	4.7	0.54
	3	●	●	●					24.2	2.9	0.55	3.9	10.17
	4	●	●	●					34.6	3.2	0.52	3.4	8.44
[12]	1	●	●						30.0	3.3	0.52	3.3	10.56
	2	●	●	●		●			36.2	3.5	0.59	2.7	7.82
	3	●	●	●		●			30.0	3.1	0.53	2.7	7.80
	4	●	●			●			46.6	2.9	0.44	2.5	6.57
[13]	1		●						34.3	2.9	0.77	5.0	12.31
	2		●			●			40.0	3.3	0.95	6.8	18.52
	3		●			●			45.0	3.0	0.56	6.4	12.87
	4	●	●			●			46.6	2.4	0.38	3.3	10.53
[14]	1	●	●						14.5	2.5	0.46	4.9	11.49
	2	●	●					●	23.8	2.7	0.94	5.2	12.84
	3	●	●			●		●	20.0	2.2	0.47	4.2	9.45
	4	●	●	●		●		●	31.0	2.7	0.58	4.2	10.23
[15]	1		●						25.5	2.4	0.73	5.0	14.90
	2	●		●		●			24.0	3.0	0.72	4.5	12.96
	3							●	49.5	2.3	0.48	3.0	9.59
	4		●					●	54.5	3.3	0.64	3.7	6.68
[16]	1	●	●						17.5	2.1	0.57	3.6	9.69
	2	●	●						36.0	3.9	0.73	2.9	7.22
	3	●	●	●					36.0	3.6	0.51	3.0	8.19
	4	●	●	●					34.0	2.9	0.66	2.7	7.14
[17]	1		●						10.0	2.5	0.34	2.2	5.50
	2	●				●			20.0	2.6	0.57	5.6	13.48
	3	●	●			●			20.0	2.6	0.51	5.2	13.57
	4	●				●			28.0	2.6	0.41	3.7	9.94
[18]	1		●						18.4	2.8	0.54	2.8	6.98
	2	●	●			●			22.0	2.9	0.85	3.6	9.80
	3		●	●					24.0	2.3	0.34	3.7	9.58
	4	●	●			●			27.0	2.7	0.41	2.2	5.95
[19]	1	●				●			10.6	2.6	0.58	6.3	20.39
	2	●	●			●			25.0	3.0	0.86	4.4	14.46
	3	●		●	●	●			18.0	2.6	0.40	5.9	13.59
	4	●	●			●			25.0	2.6	0.37	3.1	8.16
[20]	1	●				●			23.4	2.5	0.56	3.8	9.88
	2	●	●			●			41.0	3.2	0.86	4.0	11.86
	3	●	●			●			25.0	2.3	0.59	4.3	14.90
	4	●	●			●			47.5	2.9	0.49	11.7	9.41

意識内容の番号 1. (速さ) 3. (針の持ち方) 5. (手の動き) 7. (糸しごき)
 2. (きれいさ) 4. (指ぬき使用) 6. (両手間隔)

表 6 角度・1目の長さ・縫いの全長の平均と分散

回数	平均・分散	角度の平均 (度)	角度の偏差 (度)	1目の偏差 (mm)	全長 (cm)
1	平均	4.1832	10.9218	0.5192	19.86
	分散	1.8723	14.5185	0.0149	56.4414
2	平均	3.9824	10.2912	0.7474	30.0650
	分散	1.5767	12.4879	0.0309	36.9623
3	平均	3.7559	10.1296	0.5050	30.6900
	分散	1.1909	8.2590	0.0089	75.9189
4	平均	3.4136	8.6984	0.4623	37.6250
	分散	0.8617	5.9229	0.0088	67.6969

表 7 角度・1目の長さ・縫いの全長の差の検定

回数比較	角度の平均 (度)	角度の偏差 (度)	1目の偏差 (mm)	全長 (cm)
1回と2回	0.4835	0.5427	4.7687 ⁽⁻⁾ ***	4.7222***
2回と3回	0.6088	0.1587	5.4338***	0.2631
3回と4回	1.0685	1.6996	1.4353	2.5880**
1回と4回	2.0815*	2.1993**	1.6529	7.1306***

備考 *10% **5% ***1%で有意差あり

められた。1目の長さ、長さの偏差ともに中間段階では変化があったものの、最終的には差がないことから、1目の長さは3mmを目標として、第1回から縫えていたのである。最後に角度について見ると角度の平均は差の傾向がある程度で、その偏差に5%で差が認められていることから、僅かながら「おどり目」の程度は減少したといえる。

2. なみ縫い技能の習得と意識との関連について、

なみ縫い練習目標のうち、「速さ」、「1目の大きさ」、「1目のゆがみ」の3点について、4回にわたる測定結果から、習熟の傾向がみられるか否かの判定を試みることにした。意識の内容と測定結果との関係は表5のとおりである。

そこで意識の項目数と「縫いの全長」、「1目の長さ」、「角度」の計測結果との関連から、それぞれの習熟係数を算定し、習熟の有無をみることにした。即ち「速さ」については「縫いの全長」における習熟係数を、「1目の大きさ」については「1目の長さ」の標準偏差における習熟係数を、「1目のゆがみ」については「角度の大きさ」の平均における習熟係数（1目のゆがみⅠ…表12～15）、ならびに、角度の大きさの標準偏差（1目のゆがみⅡ…表12～15）における習熟係数によることにした。既に記したように、毎回の意識項目数には表5で分かるとおり、例えば被験者〔1〕は第1回の意識内容は2で、きれいさの1項目のみであるが、第2回は2のきれいさと、3の針のもち方、5の手の動きと3項目にわたっ

て意識し、上達を図ろうとしている。以下〔２〕…〔２０〕までの被験者が、それぞれに自らの意識によって縫っていることから、これらの意識内容の項目数により以下のＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ４分類を試みた。

- A. ４回の練習のうち、３回以上１項目を意識した項目の数による分類。（表８）
- B. 「速さ」の項目を中心に、３回以上同一項目を意識した項目の数による分類。（表９）
- C. 「きれいさ」の項目を中心に、３回以上同一項目を意識した項目の数による分類。（表１０）
- D. 毎回の練習において、意識した項目数による分類。（表１１）

これら４分類を習熟理論の対数線型習熟モデル⁶⁾ $y = ft^{-a}$ に基づき、習熟係数（ a ）を求めた結果をＡ'からＤ'までの４分類として、（表１２）から（表１５）に記す。

まず、

表１２は、Ａの習熟係数である。したがって４回の練習のうち、３回以上の項目を意識した項目の数によって分類したところ、速さ、即ち、縫いの全長では１項目のみ３回以上同一項目を意識した場合が長く、１目のゆがみも大体良好である。１目のゆがみ、即ち、おどり目は３回以上３項目を意識した場合がよい結果になっている。逆に３項目に意識した場合、おどり目はよいが、１目の長さが不揃いで目立って悪いことが分かる。

表１３は、Ｂの習熟係数である。速さを意識しているため他の点ではよくない。むしろ、速さに他の項目を加えて意識した場合、１目の揃いはよくないがその他の点ではよいことが分かる。

表１４は、Ｃの習熟係数である。「きれいさ」の項目に加えて、他の項目にも着目した方が全般的によい傾向になることが分かる。

表 8 4回の練習のうち、3回以上同一項目

	回答項目数	人 数	該 当 者
A	1 項 目	4	5, 7, 8, 18
	2 項 目	10	1, 2, 3, 4, 6, 9, 13, 16, 17, 19
	3 項 目	5	10, 11, 12, 14, 20
	そ の 他	1	15
	計	20	

表 9 「速さ」の項目を中心に3回以上同一項目

	回答項目数	人 数	該 当 者
B	「速さ」1項目のみ	1	8
	1項目+他1項目	7	3, 4, 6, 9, 16, 17, 19
	1項目+他2項目	5	10, 11, 12, 14, 20
	そ の 他	7	1, 2, 5, 7, 13, 15, 18
	計	20	

表10 「きれいさ」の項目を中心に3回以上同一項目

回答項目数	人数	該当者
「きれいさ」2項目のみ	3	5, 7, 18
2項目+他1項目	7	1, 2, 3, 4, 6, 9, 13
2項目+他2項目	5	10, 11, 12, 14, 20
その他	5	8, 15, 16, 17, 19
計	20	

表11 毎回の項目数

回答項目数	人数	回数	該当者
1項目	2	2回以上1項目	5, 15
2項目	6	2回以上2項目	7, 8, 9, 13, 16, 17
3項目	9	2回以上3項目	1, 2, 4, 6, 11, 12, 18, 19, 20
4項目以上	3	その他	3, 10, 14

表12 表8の分類による速さ, 1目の長さ, 1目のゆがみの習熟係数

項目数	速さ	1目の長さ	1目のゆがみ I	1目のゆがみ II
1項目	+3.1	Δ +1.60	+3.5	+3.0
2項目	+1.9	\times +0.55	Δ +5.8	\times +2.8
3項目	+1.6	\times +0.20	+5.6	+4.5

習熟曲線より対数の回帰を求めるとき, その回帰への相関係数が以下のとき印をつけた。

注 $R < 0.40$ \times

$0.40 \leq R < 0.70$ Δ

$0.70 \leq R$ 無印

表13 表9の分類による速さ, 1目の長さ, 1目のゆがみの習熟係数

項目数	速さ	1目の長さ	1目のゆがみ I	1目のゆがみ II
速さのみ	+4.55	Δ -1.4	\times +0.02	\times +0.1
速さ+1項目	+1.65	\times +0.5	+10.90	+12.6
速さ+2項目	+1.60	\times +0.2	+5.00	+4.5

習熟曲線より対数の回帰を求めるとき, その回帰への相関係数が以下のとき印をつけた。

注 $R < 0.40$ \times

$0.40 \leq R < 0.70$ Δ

$0.70 \leq R$ 無印

表14 表10の分類による速さ、1目の長さ、1目のゆがみの習熟係数

項 目 数	速 さ	1目の長さ	1目のゆがみ I	1目のゆがみ II
C' きれいさのみ	+2.55	△ +1.2	× -2.2	+ 3.50
きれいさ + 1 項目	+2.10	× +0.5	+18.9	- 14.57
きれいさ + 2 項目	+1.60	× +0.2	+ 5.6	+ 4.50

習熟曲線より対数の回帰を求めるとき、その回帰への相関係数が以下のとき印をつけた。

注 R < 0.40 ×
 0.40 ≤ R < 0.70 △
 0.70 ≤ R 無印

表15 表11の分類による速さ、1目の長さ、1目のゆがみの習熟係数

項目数によるグループ	速 さ	1目の長さ	1目のゆがみ I	1目のゆがみ II
D' 1 項目 グループ	+1.5	+3.00	+2.3	+2.2
2 項目 グループ	+2.7	× +1.60	+1.7	△ +3.1
3 項目 グループ	+1.9	× +0.80	+8.2	△ +2.9
その他のグループ	+1.8	× -0.02	+4.4	+5.2

習熟曲線より対数の回帰を求めるとき、その回帰への相関係数が以下のとき印をつけた。

注 R < 0.40 ×
 0.40 ≤ R < 0.70 △
 0.70 ≤ R 無印

表15は、Dの習熟係数である。毎回1項目意識している場合、係数そのものがよいとはいえないが、なみ縫い練習が目標としている「速さ」、「1目の大きさ」の揃い方（大小不揃い）「1目のゆがみ」（おどり目）4点いずれもが係数は低いけれども揃ってよいといえる。実験回数が少ないため、十分な習熟係数は得られていないが、望ましい意識の傾向が読みとれるといえよう。

ま と め

なみ縫い指導でこれまで目標としている、①速さ、②1目の長さ、③縫い目のゆがみについての技能の習得には、かなり時間を要することが関係者の課題である。デジタイザーとマイクロコンピュータを組み合わせた“なみ縫い計測装置”によって縫い目の数量化が可能になって以来、練習効果を数的に認める機会を得ることも可能になった。

この調査では、2年間被服構成実習（和裁）履修者20名を対象とし、速く縫うために縫いの全長を測定し、1目の大きさの大小不揃いができないよう1目の長さを測定し、おどり目にならないよう縫い目の基線に対する角度を測定して、4回にわたる測定結果をまとめたのである。その結果、縫いの全長は全体的に極めてよく伸び、速く縫えるようになった。1目のゆがみ、即ち、おどり目は角度の偏差に僅かながら差がみられたことから、直線に近づく練習効果を認めることができた。

技能習得効果を知るための実験的調査としては、各回ごとの期間が6か月ないし8か月とへだたっていたこと、練習のたびに重点とするねらいを自由に選ばせたこと等の条件に反省はあるが、速く縫えるようになった以外に縫い目のゆがみが少なくなったことの判明は一つの知見であった。

次に意識の関係であるが、7項目の意識内容が果たしてこれでよいかという問題である。2のきれいに縫うは抽象的目標となり、今後は検討の必要がある。それはさておき、7項目にわたる内容をどのようにして意識させるのがよいか、内容・方法についても課題は残るが、今回の7項目からみると、速く縫うには表12から速く縫うという目標をもち続けるとよい。おどり目対策としては速き同様にその目標をもち続けるとよい。表13から分かることは、速さ1項目だけを意識すると1目の長さ、1目のゆがみについては十分とはいえない。表14からは、きれいさと他の項目に着目した方がよいといえるのではなからうか。表15では、毎回1項目のみ意識したグループの係数そのものは大きいとはいえないが、すべてにおいて、順調に習熟しているようである。

以上の結果から、この調査研究目的とした縫いの「速さ」については、2年間の習熟は十分に認められた。

次に意識との関連は次のことがいえるのではなからうか。

「速さ」「きれいさ」いずれも1項目を意識するよりも他の項目をも意識することが必要であろう。

さて、今後の課題としては、本研究の反省から意識内容の7項目の再検討、意識のもたせ方として、被験者の主体性にまかせるか、指導者が与える等の他に、実施期間の間隔があげられる。

現在の衣生活を見ると極めて多様化しており和服離れの声もあるが、20才代の短大生周辺には意外に和服愛好者もお見逃せない。また、縫いの技能が身につくことにより、積極的に衣生活管理への関心も高まるなど、なみ縫い指導に指導者が情熱をもつことへの反応は学生間で十分察知することができる。このような傾向は数字には示されないが教育者の喜びである。本報の調査結果をふまえ、第1年次生を対象に適正な意識内容をもって実施期間をも縮小し、続いて研究を重ねようと考えている。

本研究を進めるにあたり、ご指導ご協力をいただきました神戸女子大学瀬戸短期大学、西村綾子教授ならびに森山康子助手、測定をして下さった窪田尚子さんに深く感謝いたします。

（註）

- 1) 三田利子：中国短期大学紀要，16，1（1985）。
- 2) 三田利子：中国短期大学紀要，17，11（1986）。
- 3) 三田利子：中国短期大学紀要，19，25（1988）。
- 4) 岡山大学教育学部家庭科研究室製作：Video教材「やってみよう、なみ縫い、長針」（1985）。
- 5) 西村綾子，大崎紘一，大倉美恵：日本家庭科教育学会誌，29，2，48（1986）。
- 6) 大倉美恵，大崎紘一，西村綾子：日本家庭科教育学会誌，31，2，65（1982）。